

プラハ学派の不易流行性

— Automatisierung, Aktualisierung の視点から¹ —

十 河 健 二

0. 本論ではプラハ学派の言語研究の特性について、とりわけ Automatisierung, Aktualisierung² に焦点を当てて、専ら俳諧の世界で使用される不易流行の観点から考察する。その構成は以下のとおり：1. 不易流行について、2. プラハ学派の言語観察について、3. Automatisierung, Aktualisierung について、4. 結論。このようにして、プラハ学派の言語観察に不易流行性を見出そうと思う。

1. 「不易流行」³ は元来、俳諧の世界でその言語芸術の本質を表現する用語である。今回は、恒常的に変化を求めるところに不変の特性を認めることができる、と基本的に解釈をしようと思う。このことで、俳句の発展のみならず、あらゆる科学に不可欠の発展の要件が表され、加えて、人間の精神活動に必要な条件が示されると思われるからである。

2. 「言語は、自然物に類推されるべきものでなく、文化として取り扱われねばならないものである。(略) 学問的には、言語を文化として扱うことが出来る、言語に対する見方を設定することが先決問題である。近代言語学には、そのような言語を文化として扱う理論的根拠が欠如していることに、先づ、留意する必要があるのである。」⁴ プラハ学派の言語文化論は、近代の、そして現代の言語学に対する、時枝誠記氏のこの的確な批評を早くから不適切なものとした、数少ない学派かもしれない。

すなわち、この学派は言語現象を「口頭による表現」と「文字による表現」とに分類し、対等の研究価値を置く⁵。ラングの言語学に止まらずパロールの言語学をも試み、これは「言語体系の研究を言語コミュニケーション

ンの研究を通して、完全な物とする試み」と評価される⁶。かつての青年文法学派に代表される歴史一比較の言語学ないしは通時言語学を離れ、言語を共時的な研究対象とするものの、「通時的観察の視野を失っていない。」⁷このようにして、言語を文化形成の基礎に置く観察を行うのである。また当時の言語純粋主義を、硬直した言語観だとして論駁したことも言い添えておこう⁸。プラハ学派の特質はしたがって、中庸を得た言語観察の姿勢といえよう。

さて発話行為は、一般的に複数以上の人間の言語活動により、展開されるのが常である。その際の言語形式は、発話者の職業・血縁等の社会的な条件や地理的な条件が複雑に影響しあって選択される。

プラハ学派の言語観察には、発話行為の環境を、グループや共同体、地理的な条件のもとで扱うという基本姿勢が見られ、またコミュニケーションの関連では、コミュニケーションの環境、コミュニケーションの相手の数、相手の個人的特徴、相手の社会的役割、相手の具体的な活動、そして話題等のいわゆるコミュニケーションの状況 (Kommunikationssituation) も考慮して、扱うという姿勢も見られる。クラウス (J. Kraus) によれば、これは「具体的なコミュニケーションの状況、言語の発話との関連」と表現され、一連の社会言語学の問題の一つである⁹。

コミュニケーションの状態では、本質的に具体的で社会的な要素を念頭に置いた言語考察が展開される。他方、言語状況 (Sprachsituation) では、特定の時代の特定の国家や地域における政治的・社会的・経済的また文化的な条件のもとで、言語考察が展開される。したがってプラハ学派でいわれる Automatisierung, Aktualisierung では、コミュニケーションの状態との関連性が強く意識される。もちろんこの二つの事柄が言語状態にも関連することは明らかである。

プラハ学派の Literatursprache¹⁰ の理論は、そのノルムの決定が課題の一つであるが、柔軟性のないノルムの決定は望む所ではない。これは言語文化自体がその特質として柔軟性を持つことと深い関連がある。硬直した文化は考えられず、またそのような文化に進展性はない。Literatursprache のノルムに柔軟性がないと、この言語形式の機能が無意味になるからである。

ハヴラーネク (B. Havránek) は民族の自己主張の問題としてチェコ語と文化に対する意識を強化させようと、*„Die Aufgaben der Literatursprache“* (1932)、*„Die funktionale Schichtung der Literatursprache“* (1942) を著した¹¹。とりわけ後者で例示されるような相違を解消しようとはしないのは¹²、プラハ学派の代表的研究者の一人として当然であろう。むしろこれを容認する一方で、Literatursprache の理論の確立に取り組むのである。

このようなハヴラーネクの「言語学者は Literatursprache のノルムの決定に携わることができる。また決定したノルムを定着化させるのにも貢献できる」¹³という言葉はプラハ学派の言語観察の姿勢を端的に表すものである。しかし、Literatursprache の活動範囲が、文学や公の場での口頭および文字による発話に限られることを、この学派は承知している¹⁴。

Literatursprache のノルムの決定ということは、ハヴラーネクに依れば、民衆語 (Volkssprache) のノルムとの相違を明瞭にするということである。つまり Literatursprache のノルムの方が機能・語彙・表現様式が豊かである。日本語の場合でも、抽象的な内容の話はどうしても標準語を使用せざるを得ないことは明らかである。Literatursprache のこのような特性を、時代とともに減少させるのではなくて、維持は勿論、時代の変化とともに育成の方向で努力するのが、言語学者の務めであると、ハヴラーネクは言うのである。

3. さて、この論考のそもそもの発端は、プラハ学派内で Automatisierung, Aktualisierung の取り扱いが必ずしも一致していないののではないか、という洞察である。そのために、主にハヴラーネクとホラーレク (K. Horálek) の論考を取り上げ、両者の見解の相違を明らかにする。その結果、*„Thesen“* にみられる Automatisierung および Aktualisierung に関連する非常に簡潔な定義¹⁵ と、ハヴラーネクそしてホラーレクのこれらについての見解との関連性が、プラハ学派の言語観察の方法論に兆した歴史的な変化の一部として、理解できるであろう。さらにこのような観察史が、冒頭で言及した「不易流行」性の表れであると評価できるのではないかと思われる。

3. 1. Automatisierung, Aktualisierung という表現は、言語学ではあるいはそれほど馴染みがないかもしれない。例えば „*Lexikon der Germanistischen Linguistik*“ では、次の様な説明が見られる¹⁶。

1) Automatisierung について : Tritt einem eine Person immer nur in einer bestimmten Gesprächskonstellation gegenüber (sei die Person nun Schalterbeamter, Lehrer, Geschäftspartner oder Fernsehmoderator), so automatisiert sich der Bezug zu dieser Person entsprechend den Bedingungen der jeweiligen Kommunikation.

(ある人物[例えば、窓口係、教師、共同経営者やテレビの司会者]が、いつもある特定の対話状況でのみ、人に対応すると、その時々でのコミュニケーションの条件に相応して、その人物との係わり方が自動的にできあがる。)

2) Aktualisierung について : Die Aussage *dies ist Sam's Rauchen*, tritt sie als Kern einer Äußerung auf, etwa einer Aufforderung, RAUCHEN VON SAM zu aktualisieren, ist lediglich ‚exemplarische‘ Verständigung über den Sinn von *Sam's Rauchen*,...)

(*dies ist Sam's Rauchen* という陳述は、例えば、サムのお煙を現実化させるという要請を表すような発話の中心として現れるならば、「サムのお煙」という意味を「模範的に」伝達するにすぎない。)

1) では automatisieren は、コミュニケーションの展開で当事者間の関係が社会的な対話環境によって自動的に成立する、と理解できよう。対話環境とは対話の内容、その相手、その場所などを挙げる事が出来るが、それらによって当事者間の対話関係が当事者の意志を超えて決定されるといえる。

2) では、aktualisieren は文字通り「現実化する」という表現が相当する。

プラハ学派で言われる Automatisierung, Aktualisierung に関する説明は、今紹介したのとは趣が異なるようである。

3. 2. 0 Automatisierung, Aktualisierung の初期の内容。

プラハ学派のこの二つの用語に関連する基本的な記述を挙げよう : Die

in diesen Ebenen angeordneten Ausdrucksmittel tendieren... dahin, in der mitteilenden Redetätigkeit automatisiert zu werden, in der sprachlich-dichterischen Tätigkeit dagegen, sich zu aktualisieren¹⁷.

(〔言語体系のあらゆる〕レヴェルで整理された表現手段には...伝達の発話行為では automatisieren される傾向, 逆に言語—文学的な行為では aktualisieren される傾向がある。)(〔 〕内は十河による。)

プラハ学派の活動は, 第二次世界大戦を境にして変化を遂げた。いわゆる古典期のその活動は言語体系の究明であり, そして今日では, 言葉によるコミュニケーション, 言語の体系的な集大成 (Kodifikation) などを論究の対象としているのである¹⁸。このような言語観察の変化は社会現象・社会構造の変化から遊離したものではなく, とりわけマスメディアの未曾有の発展と関連が深い。ラジオ, テレビの言語的な影響は学校の言語教育に勝るとも劣らない。言語学派の有する概念の内容の変化もこれと無関係ではない。

3. 2. 1. ハヴラーネクの見解。

Automatisierung の形態はハヴラーネクによれば, 二つに大別される。異なる言語間での現象と, 同一言語内での異なった形式の言語間での現象である。

異なる言語間での現象。ハヴラーネクは Automatisierung の現象を理解させるために, まず翻訳の分野から一例を挙げる¹⁹。zdravstvutje というロシア語の挨拶はチェコ語に逐語訳すると, bud'te zdráv (健康であれ) である。このようなチェコ語の逐語訳はチェコ語の言語文化では一般に通用しない。なぜなら, チェコ語にはそれ独特の挨拶の表現があるからである²⁰。そしてロシア語のこの zdravstvutje はチェコ語の多様な挨拶の何れかに相当するのではなく, チェコ語のすべての挨拶の形式に相当する。Automatisierung の現象はこのように異なる言語間の表現内容の一致で観察される。

同一言語内での異なった形式の言語の間での現象。この場合でも基本的には先ほどの場合と変わらない。

形容詞 případný のハヴラーネクによる用例を挙げよう: 1) Dal mu

případnou odpověď'. : 彼は彼に適切な返事をした. 2) případnou odpověď zašlete do čtrnácti dnů. : どんな返事でも2週間以内に送って下さい²¹.

případný は (etwaig, eventuell) の意味ならば Literatursprache に属し, (passend, gehörig) の意味ならば日常語に属する. したがって, případný の意味内容をめぐり, 言語使用の状況に合わせて, Automatisierung の現象が生じていると, ハヴラーネクは考える.

次に Aktualisierung は, 受け手に与える刺激という意味では Automatisierung と対照的である. ハヴラーネクでは「言語手段の使用自体が注意を引き, 普通ではないと見なされ, Automatisierung に当てはまらず」, また「生き生きとした, 文学的な隠喩」であるのが Aktualisierung である²².

例えば, 我々の日常生活に不可欠である対話の大部分は Automatisierung とされる言語手段であるが, 時に Aktualisierung といわれる言語手段を使用して, 話し相手の注意を引き, 対話に活気付けを行うことがある. したがって, 日常生活の言語活動では洒落あるいはギャグ等もこれに相当する. Automatisierung の担当しえない機能である.

同一の表現内容であっても, 文学作品の一部として表現される場合は文学上の美的な要素が加えられ, 文学の言語 (Dichtersprache)²³ の形式とされる. その内容が科学的であれば, 正確に表現することを眼目に置き, 科学の言語 (Wissenschaftssprache) の形式とされる. また例えばニュース等では, 一定量の情報の伝達を行い, 事柄を述べる言語 (Sachsprache) となる. 日常の対話では理解し合うということが最大の目的となり, これらの形式が錯綜しうる²⁴.

これらの形式の言語の間で, ある語や表現が一方では Automatisierung であり, 他方では Aktualisierung であることはよくある. すなわち科学の言語で Automatisierung であっても, 大衆向けの科学記事では専門的な Automatisierung が不可能という場合がありうる. 専門家には常識である科学の専門用語が, 大衆の理解は困難だと予想されても, 他の言葉での言い替えが不可能なときは, その専門用語をそのまま使用せざるをえない. すなわち, 専門分野の Automatisierung が日常語で Aktuali-

sierung に変化する場合があります²⁵。1995年1月17日の大地動乱が「活断層」という専門用語の存在を意識させたことは、記憶に新しい。

Automatisierung, Aktualisierung の現象は、特定の形式の言語の中で、語や表現それぞれに対して絶対的な性格のものではない。それは時間の断面の視点からだけでなく、時間の流れの点からも言えると思われる。特に Aktualisierung はノルムからの遊離をその本質とする。

またハヴラーネクは前述の „*Die Aufgaben der Literatursprache und die Sprachkultur*“ (1932) で、Literatursprache を機能の視点から細分化している²⁶。このような Literatursprache の機能の相互関連の一つとして、語や表現に見られる、いわば「渡り」の現象を説明するために Automatisierung および Aktualisierung の表現を用いると評価できる。

3. 2. 2. ホラーレクの見解。

ホラーレクの論考は1982年に公表された。ハヴラーネクのは1932年、まずチェコ語で公表された。因みにタイトルは „*Úkoly spisovného jazyka a jeho kultra*“ である。その論考で Automatisierung, Aktualisierung の二つについて、「一見したところでは、相関関係があり、同等の権利を持った対立概念のようだが、事実はそのようではない」²⁷ とホラーレクは明言する。プラハ学派の目標の一つは、Literatursprache の育成であるが、その成果を遅延させた要因の一つとして、Automatisierung, Aktualisierung を対立概念としたこと、これが Literatursprache の理論の一つのいわば「揉め事」の要因であったと、ホラーレクは言っている²⁸。

「日常的でない言語手段を、何度も繰り返して使用する結果、日常的なものへと変化する経過が Automatisierung である」とホラーレクは説明する²⁹。これに従えば、日本語で容易に具体例を挙げることができる。「情けは人の為ならず」という諺で、本来の意味が押し返けられ、一時期、表層的な解釈が定着したかに思えたものである。もしそうならば、Automatisierung の経過が完了したことになる。その他「水道が断水する」というような、奇異ではあるが、実際には比較的多く耳にする語法が認められる。

ホラーレクによれば、Automatisierung は、言語形式内で特異性のある言語手段が一般化するという「動き」或いは「過程」自体を指す。「日常的でない」ということはノルムに抵触するか、遊離している表現形態である。それが言語使用者側に奇異に映らない限り、最終的にはいわゆる市民権を得、「日常的なもの」となる。

3. 2. 3. Automatisierung の内容の変遷の背景.

ハヴラーネクでは、Automatisierung は語や表現が受け手の注意を引かない、通常の言語使用自体を指す。言及した případný や挨拶の実例、異なる形式の言語の間で観察され Automatisierung と Aktualisierung との関連で、このことを論証している。

ハヴラーネクとホラーレクとの Automatisierung の考え方の相違はここにある。つまり、結果的には「日常的な言語使用」自体の現象に焦点を当てるのがハヴラーネクの見解、「日常的な言語使用」に至る「過程」に焦点を当てて、ホラーレクの見解、ということである。

次に、Aktualisierung をホラーレクは「日常的なものから日常的でないものへの変化、生彩のない表現から躍動的な表現への変化」³⁰と説明する。すなわち「注意を表現自体の方に引き、日常的でないと評価される言語手段を使用する」ことなのである³¹。

このような説明によれば、Aktualisierung に関する限り、ハヴラーネクとホラーレクの考え方はほぼ一致しているといえる。ただホラーレクは、「変化」という表現を用いてはいるが。

したがって、ホラーレクが最初に評価した「一見したところでは、相関関係があり、同等の権利を持った対立概念のようだが、事実はそうではない」という説明は、ホラーレクの「動き」あるいは「過程」としての Automatisierung、言語使用の現象としての Aktualisierung という取り扱いで、理解が得られるであろう。対してハヴラーネクでは、この両方共に言語使用の現象の点で対立概念となっている。

とりわけ Automatisierung に関するこのような解釈の幅は、„Thesen“でこれらの概念が非常に簡潔にまた基本的にしか説明されていない、ということに原因があるようである。またその説明を見るかぎり、対立概念の

存在を暗示するかのようである。

3. 3. 解釈の可能性。

それでは Aktualisierung について、ホラーレクの言う Automatisierung のような解釈は可能なのか？ すなわち「動き」あるいは「過程」自体に焦点を当てた理解の試みを行いたいと思う。ホラーレクの Automatismierung の説明とは「過程」の方向が逆にはなるが、つまり、「日常的なものから日常的でないものへの動き」を歴史的な時間で見ることができると思われる。

死語や廃語とされるものは、以前はいずれかの形式の言語ではハヴラーネクのいう Automatismierung の現象を見せていた。これらの多くはその最盛期を境に徐々に使用されなくなった経緯を持つはずである。言語共同体内でほとんど使用されなくなった、と評価される時点で使用されると、それは、ハヴラーネクやホラーレクのいう Aktualisierung の現象である。これらが使用されなくなるまでには、かなりの時間の経過が必要であろう。したがって、ある語や表現が徐々に使用されなくなり、最終的に死語あるいは廃語と評価されるまでの過程を考えることができる。このような「過程」自体にハヴラーネクやホラーレクの語らない、Aktualisierung という表現を与えることが可能だと思われる。というのは、死語や廃語の生成過程がその時々と言語状態の新たな局面を示す、と理解すると、すなわち語彙の在庫目録の最新の状態への移行だと理解すると、死語や廃語の生成過程を Aktualisierung の新たな内容とすることができると思われるからである³²。このようにして Automatismierung と Aktualisierung とによる新たな対立概念が成立するのではあるが、これによってむしろ、新語や新造語の登場の動因の一つとして、死語や廃語の生成過程をとらえることができるということの方を強調したい。

我々の現代の生活の目まぐるしい変化が再使用の必要性を低くしていると思われるので、これは稀なことであろうが、このような語や表現が、あるとき再び何かのきっかけで、いずれかの形式の言語で使用されるならば、ハヴラーネクやホラーレクのいう Aktualisierung の現象を示し、消滅せずに何度も使用され定着するならば、ホラーレクのいう Automatismie-

rung が完了したことになる。またハヴラーネクで言及された、ある専門語が日常語で使用されて Aktualisierung を起こす現象も、頻繁な使用によって、ホラーレクのいう Automatisierung の過程が観察されると思われる。

さて言語は視覚的な面を持つので、Automatisierung や Aktualisierung を文字言語のレベルで考察することも可能である。プラハ学派では聴覚・視覚の区別を明らかにした上でこの両概念に取り組んでいるわけではない。

例えば、„Der Spiegel“ の 2 語が描かれた看板を街頭で見かけると、直ちに著名な週刊誌が連想される。「鏡のことか」と思う人は少ないであろう。逆にあるテキストで、sie steht vor dem Spiegel という表現に接した場合、コンテキストにもよろうが、週刊誌名を連想する人はほとんどいないであろう。ハヴラーネクの理論によれば、„Der Spiegel“ についてそれが街頭の看板に独特の字体で書かれた文字であれば、週刊誌名だと理解することが Automatisierung なのである。一般のテキストで「鏡」と理解する場合も同様である。

他方、ホラーレクの見解によれば、Spiegel 誌を表す „Der Spiegel“ が街頭に掲げられた当初、確かにその独特の字体や掲示された環境から、目撃者は他にない刺激を受けて、初めは奇異に感じつつ、雑誌名をある程度は意識的に連想しなくてはならなかったと思われる。しかし今日、目撃者のほとんどは雑誌名だと即座に了解するであろう。したがって Automatisierung は完了している。

ハヴラーネクやホラーレクによって語られる Automatisierung, Aktualisierung の概念は、一言語共同体内、さらに言語共同体間の語や表現の生起・消滅を、多様な言語生活に適合した形式の言語を背景にして、とらえることができると思われる。それは動植物のある種が環境の変化に適應して生き延びるか、適應能力の低さゆえに死滅に向かうか、という現象を観察する立場に共通しているのである。

3. 4. 次に、プラハ学派が使用する用語の面から、動的視点がより前面に出ている点に言及しておこう。

元来、ソヴィエトの言語学者ヴィノクル (G. O. Vinokur) によって言語文化論が旧チェコスロヴァキアに紹介されたという歴史的事実が³³, ある程度の用語の混乱をももたらしたのは、致し方のないことであった。プラハ学派では当初 ‚jazyková kultura‘ (言語文化) と ‚kultura jazyka‘ (言語の文化) とが明確な区別なく、併用されていた。

そうこうするうちに、言語文化論の目標をより明確にする意味で、また細分化により各分野の連携がより容易になるために、そして、いま述べた用語の混乱を收拾をする意味から、1976年、クハシュ (J. Kuchař) とスティフ (A. Stich) は共同してそれらの整理を行った³⁴。

1982年、クラウスは表現に多少の相違はあるものの1976年のクハシュ/スティフの提案に言及している³⁵: a) 「言語の文化」(Kultur der Sprache) では Literatursprache が使用される状況を問題にし, b) 「言語の洗練」(Kultivierung der Sprache) では Literatursprache をめぐって、とりわけ言語学者の活動が要求され, Literatursprache を進展させることがテーマである。c) 「話の文化」(Kultur der Rede) は「表現の文化」(Kultur der Ausdrucksgestaltung) とも言え、発話全体の状態を問題にする。クラウスでは「言語表現の文化」(Kultur der sprachlichen Äußerungen) および「コミュニケーションの文化」(Kultur der Kommunikation) とも言い換えることができる。d) 「話の洗練」(Kultivierung der Rede) ではコミュニケーションのレベルの高度化に注がれる言語学者の努力を問題にする。クラウスによれば「言語表現の洗練」(Kultivierung der sprachlichen Äußerungen) および「コミュニケーションの洗練」(Kultivierung der Kommunikation) とも言い換えることができる。プラハ学派はしたがって、言語と発話それぞれで、それらに係わる人々(言語使用者, 言語学者)と言語との関係を、いわゆる「動き」あるいは「過程」と、その結果である「状態」とに大別する視点を有すると言えよう。

さて1929年, Automatisierung, Aktualisierung が „Thesen“ で言及され、これを受け拡大するようにして、ハヴラーネクがこれらについて論考したのが1932年である。それはクハシュ/スティフの論考に先行すること少なくとも40年以上であるから、ハヴラーネクがこのような「動き」と

「状態」に基づく観察の視点が研究史上、形成されることは予想していなかったはずである。

しかし、本論の材料を提供したホラーレクの論考は1982年であるから、クハシェ/スティフの論考の存在を十分に意識していたと思われる。注記34からうかがえる、Kultur と kultivieren との関連性を見たときに、Aktualisierung, とりわけ Automatisierung という用語の表現形式そのものの基本的特性の一つから³⁶、すなわち、動作名詞を使用するということから、これらの研究方向に、「動的な」要素をより一層意識するという軌道修正が、ホラーレクによって行われたと言ってよかろう。このような変遷は、プラハ学派の言語観察の進展の一場面には違いないが、この学派の過去の言語学の克服を目指すと言えよう。これは社会が言語のためではなく、言語のほう为社会のために存在するという原則の背景を連想させずにはおかない。

4. このようにプラハ学派には、新しい方向を模索しつつも独自性を失わず、一言語学派としての言語観察を進展させる活動姿勢がある。このような特性は冒頭で述べた、ほかならぬ中庸を得た言語観察の姿勢に依るところが大きいであろうが、こうした言語学派の研究の歴史に、俳諧の世界でいわれる不易流行性を見出すことができよう。

すなわち、「新しみを求めてたえず変化する流行性にこそ、永遠に変わることのない不易の本質」³⁷を Aktualisierung, とりわけ Automatisierung の内容の変更や、3. 4. で紹介した用語の整理を通してでさえも、学派進展の原動力として認めることができると思われるのである。

さて、チェコ人がチェコ人たる自覚を抱いた民族運動の時代、すなわち „Zeit der nationalen Wiedergeburt“ と称される「民族復興の時代」³⁸は外来語の侵入との戦いの時代だったと言われている。時代が下ってプラハ学派成立当時、ドイツ語化に過敏で、感情的に攻撃を行い、言語純粋主義の防波堤を築こうとする動きが盛んであったが、「この考え方は時代錯誤であり、全く正当化されるものではなかった」³⁹のである。言語純粋主義そのものは、13世紀以降のドイツ人の東方植民によるドイツ語の浸透、ピーラー・ホラの戦い（1620年）でチェコ独立軍が敗れた結果、チェ

コ語の文献が焚書を受けたこと、18世紀、ヨーゼフ二世による学校でのチェコ語の廃止などの歴史条件——これらはハプスブルク家のドイツ化政策の一環とされる——を背景に醸成されたのであろうが⁴⁰、その言語純粋主義がその後、プラハ学派にチェコ言語学の席を譲らなくてはならなかったのは、畢竟、Literaturspracheの機能が「民族復興の時代」と比較して、拡大していたということに注意することを怠り、言語状態が変わり行くものであるということに着目しなかったからだ、と推論される。換言すると、不易流行の特性がこの純粋主義には不足していたからであろう、という見解を得るに至るのである。

注

- 1 I. 本論は第49回日本独文学会研究発表会（1995年5月、立教大学）における発表原稿に、加筆・再構成を施したものである。

II. チェコ語の発音を尊重して、今までと異なり「ブーク」を「プラハ」と表記する。プラハ言語学派：pražská jazyková škola あるいは pražský lingvistický kroužek. pražská, pražský は Praha の形容詞形。

- 2 Automatisierung, Aktualisierung について、基本的に原語使用の方針をとることにしたい。というのは、日本語訳では、それが原語の意味内容に少なからぬ影響を与えることが考えられるからである。両者はそれぞれ「自動化」〔アクチュアリゼーション〕または「現勢化」(『言語』1975年4月号61ページ参照)、「アクトゥアリザツェ (非自動化, 異化)」(『言語』1976年3月号14ページ参照)と表現された例がある。

Literatursprache を「標準語」と表現する場合、Hochsprache, Nationalsprache, Standardsprache, またはわが国でいわれる「標準語」等との関連が問題になろう。「文章語」の表現では「文章」という語が漠然としている。いずれも帯に短し褌に長しの有り様である。良きにつけ、悪しきにつけ、日本語には外来語に対して寛容な特性があるのでこれも原語使用としたい。注10)をも参照。

- 3 不易流行に関する説明を紹介しよう：

I. 蕉風俳諧の基本理念の一つ。「不易」は永遠に変わらない、昔からいまに続く芸術の精神、「流行」は時代時代に応じて変化するもの、この矛盾する二つのものの根元は実は同じで、芸術はこの相反する二面を備えてはじめて真の芸術として完成する。なお、この語については芭蕉自身書いたものがないの

で、さまざまな解釈がなされている。(新井政義『成語林』1992年 旺文社)

Ⅱ. 蕉風俳諧の理念の一つ。新しみを求めてたえず変化する流行性にこそ、永遠に変わることのない不易の本質があり、不易と流行とは根本において一つであるとし、それは風雅の域に根ざすものだとする説。(『日本國語大辞典』第9巻 小学館)

Ⅲ. ...新しみを求める流行こそ俳諧の実現すべき価値の永遠性であり、流行はその実践ということになる。(松尾靖秋『俳句辞典 近世』昭和52年 桜風社)

なお、「不易流行」はドイツ語では „das für alle Zeit Unwandelbare bei sich wandelnder Form“ と表現できよう。次の説明を参照：Bashos Haikai kennt keine Themenbegrenzung, fordert aber eine Aussage, die neben ungewöhl. Prägnanz Geschlossenheit besitzt, ohne abschließend zu sein (Nachhall, yoin), deren Gehalt bei sich wandelnder Form (ryuko) das für alle Zeit Unwandelbare (fueki) kundtut,...(Hrsg. Gero von Wilpert: *Lexikon der Weltliteratur* Bd. 1, Kröner Verlag, Stuttgart 1975, S. 132.)

この表現は、上記3項の説明を見ると、不易流行の深奥に必ずしも達していない感があるが、本論では „Form“ を俳句の表現等に関連させるだけでなく、様々な分野の要素にも当てはまるものと考える。

- 4 時枝誠記『国語問題のために』1962年 東京大学出版会28～29ページ。
- 5 I. Vgl. Vachek, Josef: *Zum Problem der geschriebenen Sprache*, 1939. In: *Grundlagen der Sprachkultur*, Teil 1, S. 229ff. II. 十河健二『プラーク学派の言語文化論と言語のノルムからみた書き言葉と話し言葉について』関西大学『独逸文学』第36号 1992年 80ページ以降参照。
- 6 vgl. I. Scharnhorst, Jürgen/Ising, Erika: *Einführung*, 1976. In: Teil 1, S. 19. II. Skalička, Vladimír: *Die Notwendigkeit einer Linguistik der ‚Parole‘* 1948. In: Teil 1, S. 296ff.
- 7 Vgl. I. *Thesen des Prager Linguistenkreises zum 1. Internationalen Slawistenkongreß*, 1929. In: Teil 1, S. 44ff. II. Scharnhorst/Ising, 1976, a. a. O., S. 15. III. Horálek, Karel: *Zur Geschichte der Prager Linguistik und ihrer internationalen Wirkung*, 1976, In: Teil 1, S. 27. IV. Horálek, *Die Entstehung der funktionalen Sprachwissenschaft und ihr Beitrag zur Theorie der Sprachkultur*, 1982. In: *Grundlagen der Sprachkultur*, Teil 2, S. 12ff.

- 8 Vgl. I. Scharnhorst/Ising, 1976, a. a. O., S. 13. II. Horálek, 1982, a. a. O., S. 33. III. Mathesius, Vilém: *Über die Notwendigkeit der Stabilität in der Literatursprache*, 1932. In: Teil 1. S. 87.
- 9 そのほか言語記号体系のさまざまなレベル, 言語の存在形式 (Literatursprache, Umgangssprache 等) や言語のノルム等を対象にする「社会的存在 (社会的形成体・文化水準・社会集団) と言語体系との関連」, 言語使用者の言語の知識, 言語評価等を対象とする「社会意識の現象と言語との関連」を挙げている。(vgl. Kraus, Jiří: *Zu soziolinguistischen Aspekten der Sprachkultur in der Tschechoslowakei*, 1982. In: Teil 2, S. 259ff.)
- 10 Literatursprache はその名のとおりに, 文章作成・文学作品等に使用される言語形式である。日本語では「標準語」, 「文章語」あるいは「文語」と訳された例がある (I. 十河健二『プラーク学派の「言語文化」論からみたわが国の外国語教育の改善について』阪神ドイツ文学会『ドイツ文学論攷』, 1988年, XXX号164ページ参照。II. 『言語』1976年3月号14ページ参照)。また拙論『プラーク学派の言語文化論と言語のノルムからみた書き言葉と話し言葉について』では「標準語」を用いた。
- 11 Scharnhorst/Ising, 1976, a. a. O. In: Teil 1, S. 17.
- 12 Havránek, Bohuslav による Literatursprache, Umgangssprache 間の語彙ならびに表現上の相違を数例挙げよう: Literatursprache — Umgangssprache の順: řekl jsem — řek jsem (ich habe gesagt), píši — pišu (ich schreibe), piši — pišou (sie schreiben), přijdu — přidu (ich werde kommen), netluc — netluč (schlage nicht!), mléko — mlíko (Milch) (Vgl. Havránek, *Die funktionale Schichtung der Literatursprache*, 1942. Teil 1, S. 159.)
- 13 Havránek, *Die Aufgaben der Literatursprache und die Sprachkultur*, 1932. In: Teil 1, S. 130.
- 14 *Allgemeine Grundsätze der Sprachkultur*, 1932. In: Teil 1, S. 76.
- 15 *Thesen des Prager Linguistenkreises zum 1. Internationalen Slawistenkongreß* は, 1929年プラハで開催された第1回国際スラヴィスト会議の準備資料として配布された。V. マテジウス, B. ハヴラーネク, J. ムカジョフスキー, R. ヤーコブソンの共同執筆。Thesen の成立には, 1928年ハーグで開催された第1回国際言語学会でのプラハ学派の主張 (通時的観察方法からの離反, 共時的観察方法のスラヴ語学への応用) が認められたという背景がある。
- 16 *Lexikon der Germanistischen Linguistik*, Max Niemeyer Verlag, 1980.

S. 13.

- 17 *Thesen.*, 1929. In: Teil 1, S. 56.
- 18 Vgl. Kuchař, Jaroslav/Stich, Alexander, *Theorie und Praxis der Sprachkultur in der Gegenwart*, 1976. In: Teil 1, S. 341.
- 19 Vgl. Havránek, 1932, a. a. O. In: Teil 1, S. 119.
- 20 Dobré ráno (Guten Morgen). Dobrý den (Guten Tag). Dobrý večer (Guten Abend). Dobrou noc (Gute Nacht). zdravstvutje は常時使用できる。
- 21 Vgl. Havránek, 1932, a. a. O. In: Teil 1, S. 125ff.
- 22 Vgl. *Ibid.*, S. 121.
- 23 Dichtersprache について：これを「詩的言語」あるいは「詩の言語」（『言語』1976年3月号14ページ参照）と表現するならば、それはムカジョフスキーの美学の世界であり、ヤーコブソンの詩学の問題である。特に前者は「Dichtersprache を詩情的な効果を呼び起こすのに役立つ、言語手段の複合体」とする。（Horálek, 1982, a. a. O. In: Teil 2, S. 31.）しかし、「文学での使用に限定される、表現手段の体系である」（Horálek, *Zur Geschichte der Prager Linguistik.*, 1976. In: Teil 1, S. 27.）とも説明されるから、「文学の言語」とする方がここではより適切であろう。
- 24 Vgl. Havránek. 1932, a. a. O., S. 121.
- 25 Vgl. *Ibid.*, S. 123.
- 26 Literatursprache の機能：1) kommunikative Mitteilungsfunktion（コミュニケーションの伝達機能）、2) praktisch-fachliche Mitteilungsfunktion（実際上の専門的な伝達機能）、3) theoretisch-fachliche Mitteilungsfunktion（理論上の専門的な伝達機能）、4) ästhetische Mitteilungsfunktion（美的な伝達機能）。（Havránek, *Die Aufgaben der Literatursprache*, 1932. Teil 1, S. 127.）
- 27 Horálek, 1982, a. a. O., S. 30.
- 28 「揉め事」ないしは「論争の種」を挙げておこう。Literatursprache であることの基準をめぐるものが一つ。プラハ学派は、19世紀初頭以来の歴史的・美的で方言を由来とする基準を拒否した。最近50年間の Literatursprache の平均的な言語にそれを見出そうとしたのである。（Vgl. Kuchař/Stich, 1976, a. a. O. In: Teil 1, S. 335.）

またマテジウスの文の定義も挙げるができる。彼は動詞のない文を不完全だと見ていたが、これには賛成が得られなかった。後日、彼は自身の文の定

- 義をパロールの関連でのみ通用するとし、言語体系の点からも定義する必要性を認めたのである。(Vgl. Horálek, 1982, a. a. O., S. 22ff.)
- 29 Horálek, 1982, a. a. O., S. 30.
- 30 Ibid., S. 30.
- 31 Ibid., S. 30.
- 32 例えば, „*Brockhaus-Wahrig, Deutsches Wörterbuch*“に見られるaktualisierenの語義: „im System einer Sprache potentiell vorhandene Zeichen (Ausdrücke und Inhalte) im Kommunikationsprozeß verwenden“ 「言語体系で潜在的に存在する記号(表現や内容)をコミュニケーションの展開の際に使用すること」という説明で、ここでは「潜在的に存在する」という結果に時間的な要素を意識する。
- 33 十河健二『プラーク学派の「言語文化」論からみたわが国の外国語教育の改善について』160ページ参照。
- 34 a) Kultur der Sprache (言語の文化), b) Kultivierung der Sprache (言語の洗練), c) Kultur der Rede (話の文化), d) Kultivierung der Rede (話の洗練). (Vgl. Kuchař/Stich, 1976, a. a. O., S. 331.)
- 35 Kraus, 1982, a. a. O., S. 260.
- 36 チェコ語では aktualizovat (aktualisieren)-aktualizace (Aktualisierung), automatizovat (automatisieren)-automatizace (Automatisierung)の関連となる。注2)をも参照。
- 37 注3)を参照。
- 38 民族復興の時代: チェコ史では18世紀末以降をこう呼ぶ。ヨーゼフ二世により農奴制が廃止されたが、1848年の革命の失敗によってこの時代は終わる。
- 39 Kraus, 1982, a. a. O. In: Teil 2, S. 262ff.
- 40 I. ヒューレット・ジョンソン 佐藤俊男訳『東欧の新世界』, 1957年 みすず書房 95ページ参照。II. 伊東孝之他『東欧を知る事典』1993年 平凡社, 658ページ参照。
- チェコ語を保護しようとした言語純粋主義の意図は理解できるが、20世紀の言語模様を十分読むことができなかったということでもあろう。

„Fueki-Ryuko“ oder „das für alle Zeit
Unwandelbare bei sich wandelnder Form“*
in der Prager Schule

Kenji SOGO

Ausgangspunkt dieser Arbeit ist ein Versuch, die Theorie der Prager Schule unter dem Gesichtspunkt einer japanischen Sprachkunst, der Haikudichtung, zu interpretieren. Dabei soll der japanische Begriff Fueki-Ryuko (不易流行) erörtert werden, der wesentlich die Haikudichtung bestimmt.

Der Gedanke „das für alle Zeit Unwandelbare bei sich wandelnder Form“ charakterisiert eigentlich das Haiku, das besonders durch die Aktivitäten des Haiku-Meisters Basho MATSUO (松尾芭蕉, 1644-1694) damals eine blühende Epoche erlebte. Der Fachausdruck „Fueki-Ryuko“ wurde von ihm inhaltlich nicht präzise bestimmt, daher kann er verschieden interpretiert werden.

Fest steht, daß Basho mit dieser Wortschöpfung neue Möglichkeiten im Haiku aufzeigen wollte. Damit kann m. E. die Sprachkunst Haiku aus sich selbst heraus weiterentwickelt werden, ohne dabei ihre Eigenheit zu verlieren.

So dürfen wir uns damit nicht zufriedengeben, „das für alle Zeit Unwandelbare bei sich wandelnder Form“ nur in dieser Sprachkunst zu erkennen, sondern es ist nötig, diese Eigenheit als wichtiges Prinzip auch bei anderen Arbeiten, z. B. von Wissenschaftlern, Literaten, Technikern usw. herauszufinden, weil ohne Neuorientierung eine Weiterentwicklung undenkbar ist.

Besonders beschäftige ich mich mit der begrifflichen Veränderung der „Automatisierung“, die früher in den Sprachtheorien des Pra-

ger Linguistenkreises mit „Aktualisierung“ gepaart war. Heute kann man feststellen, daß beide Begriffe nicht immer paarig betrachtet werden müssen.

Ich habe die Absicht, „das für alle Zeit Unwandelbare bei sich wandelnder Form“ an den Sprachbeobachtungsweisen des Prager Linguistenkreises zu verfolgen und seine wissenschaftliche Aktualität unter dem Aspekt des kulturellen und sozialen Wandels zu erhellen.

Unter diesem Gesichtspunkt wird meine Arbeit über die Prager Sprachwissenschaft systematisiert wie folgt:

1. Einfache Vortstellung des Fueki-Ryuko
2. kurze Charakterisierungen des Prager Linguistenkreises
3. Vorstellung der Fachausdrücke „Automatisierung“ und „Aktualisierung“
 - 3.1. Vergleich dieser Fachausdrücke mit solchen aus dem anderen sprachwissenschaftlichen Handbüchern (bes. „*Lexikon der Germanistischen Linguistik*“)
 - 3.2. Vorstellung und Interpretation der inhaltlichen Veränderung der „Automatisierung“
 - 3.3. Andere Interpretationsmöglichkeiten der beiden Fachausdrücke
4. Schlußfolgerung: Um meine Auffassung zu verdeutlichen, zeige ich aus historischer Sicht die sprachwissenschaftliche Starrheit des damaligen tschechischen Purismus auf, der sich wegen seiner sprachlichen Enge nicht länger dem ideologischen Konflikt mit der Prager Schule zur Wehr setzen konnte. Die Eigenheit „des für alle Zeit Unwandelbaren bei sich wandelnder Form“ schlägt sich auch in der inhaltlichen Veränderung der „Automatisierung“ nieder.

*(Vgl. 3. Anmerkung in dieser Arbeit.)